

千葉県は、野田のキッコーマンやキノエネ、銚子のヤマサやヒゲタなど醤油の産地として名高い。その陰であり知られていないが、流山は澄んだ白みりんの醸造に成功した地として知る人ぞ知る。

江戸時代、流山はみりんの産地として地歩を固めた。その要因が高品質なことはむろんだが、江戸川に面した流山が、東北や関東地方からの物資を輸送する水運の拠点だったことも無縁ではない。

まだ鉄道やトラックがなかった時代、大量輸送ができる唯一の手段は水運だった。特に江戸川は銚子から江戸を結ぶ物流の大動脈となる。その重要な拠点となった流山には、問屋や船主などが集まって賑わいを見せた。

◆鉄道建設と流山の変化

明治時代に入り、江戸川の重要な河岸町流山に鉄道建設の話が舞い込んだ。現在のJR常磐線である。このときの逸話に、現在でも

開発の際、流山市とURは設計段階から安心と安全というコンセプトを掲げた。そもそも、道路や建物などハード面で安心や安全に配慮したまちづくりは、URの基本思想だ。全国の団地やまちづくりで蓄積したノウハウもある。URはハード面だけでなく、ソフト面でも安心と安全が行き届いたまちづくりに踏み込んでいく。

都心からわずか25分とは思えない、豊かな自然に包まれた安心・安全な街並み



豊かな緑と安心に包まれるまち 千葉・流山おおたかの森(1998年・平成10年)

変わる日本の「暮らし」と「まち」



新田匡史

illustration: Shigeyuki Sakata

流山の住民が信じて疑わない話がある。それはこんな話だ。

水運の町として発展してきた流山は、鉄道が建設されることで河岸が衰退することを恐れた。反対運動を起し、その結果流山には駅ができず、流山の南にある松戸を通るルートに変更された。流山に作るはずだった駅は柏に変更され、その柏が大きく発展したために流山は衰退した。

青木栄一氏は『鉄道忌避伝説の謎』にこう書いている。

「ルートは会社(筆者注・日本鉄道)と政府とのやり取りの間で決定されたのであって、流山その他の地域の反対運動があつて、動かされたのではないのである」

流山に常磐線の駅ができず、柏に駅ができて発展した。流山は水運が鉄道輸送に取って代わられるとともに寂れていった。反対運動の真偽はともかく、この事実だけは疑いようがない。

ただ、鉄道が通らなかつた影響は悪いことばかりではない。流山

市にある千葉県立市野谷の森公園には、環境省によって準絶滅危惧種に指定されているオオタカが生息する。昔から流山の自然を見守ってきた恵良好敏氏は、全国に約二〇〇〇羽しかいないオオタカが生息することを、流山に豊かな自然が残された証だと語る。

そんな流山に再び鉄道建設の話が持ち上がった。1991年10月に常磐新線の基本計画が承認されたのだ。現在のつくばエクスプレス(TX)である。新線開発に当たっては、大規模な宅地開発も同時に進められることになった。それは沿線の無秩序な開発を防ぎ、整備された道路や公園などが整ったまちづくりを行うためである。

そうしたなか、秋葉原駅から25分、東武野田線が乗り入れる新駅周辺を「流山新市街地」とし、約290ヘクタールの開発が行われることが決まった。こうして新市街地には、豊かな自然と共存する形で新たに約3万人の住むまちが建設されることとなった。

◆安心して子育てができる

それが「流山新市街地地区 安心・安全まちづくり協議会」である。協議会は2005年8月にTXが開通する直前、流山市と流山警察、そしてURの支援で設置された。江戸川大学、鉄道、開発事業者、地権者、市民グループなどが名を連ね、防犯分科会、子育て分科会が設置された。

新駅は流山おおたかの森と名づけられた。それから6年が経過した11年、協議会の活動は、千葉県「連携・協働による地域課題解決モデル事業」に選定された。これを受け、協議会ではモデル事業分科会を設置し、安心・安全なまちづくりを実現するための更なる取り組みに力を入れている。

特に、新たな住民となった若い世代にとって、安全なまちで安心して子育てをしたいというニーズは高い。分科会メンバーのNPO法人Rise Up女性サポート実行委員会では、サロンや公民館などで

子育て中の母親向けのイベントを開催する。週2回、母親はピラティスやヨガなどを楽しみ、横では支援者が乳幼児を見守る。「子育て中でもやりたいことを諦めなくてもいいんだよ」というコンセプトで取り組んでいます。子育てに関する悩みや苦勞を分かち合える場があることが、安心につながればと思っています」

そう語るのは、生まれ育った流山に戻ってきた代表の山中有紀さんだ。山中さんらスタッフは、もともと流山に住んでいる。彼女たちは自らを旧住民と呼び、新しく流山おおたかの森に移ってきた人を新住民と呼ぶ。山中さんが中心となり、子育て中で行き場のない新住民の母親を支援する。

近くには小児救急病院と連携し、引退した看護師の支援などで運営される病児保育サービス施設「オハナ☆キッズケア」もある。近隣に住む運営者数本敦弘氏は言う。「働くお母さんが、すべて病気の子どもさんを預けるわけではあり

ません。でも、預ける施設があると思うだけで安心なのは」

この地区には、近所の小学生の登下校を見守る「学童見守りパトロール隊」もある。この活動も旧住民である高齢者がボランティアで取り組む。山中さんも、わが子の登校が見守られていることに安心感を覚えるという。

Rise Up 副代表の高橋利恵さんは強調する。「この地区は、旧住民が壁を作らず、新住民を温かく迎え入れようとしているんです。困ったことを気軽に相談できるつながりがある」と強く言っています。

安心して長く住み続け、自分の子どもが戻って来たいと思えるまちにしたい。それが3人に共通する願いだ。流山おおたかの森には、願いを実現しようとする住民同士のふれあいがある。

街に、ルネッサンス



【企画制作】新潮社